

【研究ノート】民話・伝説のポストコロニアリスム

丸 山 隆 司

はじめに

五年前、すなわち、二〇〇五年度、山本綾乃さんが、『蛇退治譚―搜神記の一説話をめぐって―』という題で卒業研究を提出した。

『搜神記』は、四世紀ころ、中国・晋の干宝が編纂した志怪小説集である。『隋書』経籍志、『旧唐書』および『新唐書』藝文志には、「三十卷、晋干宝撰」と記載されている。時代がくんだり、明の万暦年間(1572~1612)に、二十卷本と八卷本が発行される。おそらく、同じ話が、『搜神記』にあったと推測される「感応篇」「変化篇」のような篇名のそれぞれに収められており、重複があったと思われる。そのような編纂のあり方が、同名の異なるテキストを生んだと考えられている^{＊１}。

その二十卷本の第十九卷に収められている話。

東越閩中有庸嶺、高数十里。其西北隰中有大蛇、長七八丈、大十余围、土俗常懼。東治都尉及属城长吏、多有死者。祭以牛羊、故不得禍。或與人夢、或下諭巫祝、欲得啗童女年十三者。都

尉令長、並共患之。然氣厲不息。共請求人家生婢子、兼有罪家女養之。至八月朝祭、送蛇穴口。蛇出吞嚼之。累年如此、已用九女。

爾時預復募案、未得其女。將樂李誕家、有六女無男。其小女名寄、応募欲行、父母不聽。寄曰「父母無相、惟生六女、無有一男、雖有如無。女無緹縈洛父母之功、既不能供養、徒費衣食、生無所益、不如早死。売寄之身。可得少錢、以供父母、豈不善耶」。父母慈憐、終不聽去。寄自潛行、不可禁止。寄乃告請好劍及咋蛇犬。至八月朝、便詣廟中坐。懷劍將犬。先將數石米糴、用蜜麴灌之、以置穴口。蛇使出、頭大如困、目如二尺鏡。聞蜜香氣、先啗食之。寄便放犬、犬就嚼咋、寄從後斫得數創。瘡痛急、蛇因踊出、至庭而死。寄入視穴、得其九女髑髏、悉舉出、咋言曰「汝曹怯弱、為蛇所食、甚可哀愍」。於是寄女緩步而歸。越王聞之、聘寄女為后、拜其父為將樂令、母及姉皆有賞賜。自是東治無復妖邪之物。其歌謠至今焉。

この話は、『古事記』上卷のササノヲのヲロチ退治に関連すること

について、神田秀夫「古事記と搜神記」(『古事記年報』所収)がある。一読して解るように、蛇を退治するにいたる事情やその主体が異なっているのだから、直接的な影響は想定できない。

ところが、この『搜神記』の話は、意外な関連を見せる。

すなわち、沖繩の組踊「孝行之巻」に類似する。

この「孝行之巻」は、玉城朝薫(1684~1734)が、清からの冊封使をむかえる式典のために、一七一八年に「二童敵討」「執心鐘人」を書き上げ、翌年上演。その、「銘刻子」「女物狂」「孝行之巻」を書き、組踊五番あるいは五組とした²⁴。

その「孝行之巻」とは、つぎのような話である。

伊祖の、ムルチという池に大蛇が住んでいて、田畑を荒らし、農民を困らせている。ト方にお告げがあって、十三・四才の子供を供えたら、田畑も実るだろうと言うことで、高札を出した。これを見た姉弟が、犠牲なると互いにいいだが、姉が自分のいうことを聞かないなら命を捨てるというので、弟は姉のいうことに従う。母親を説得し、姉はムルチ池へ向かう。蛇に喰われようとしたとき、「此時蛇狂い出、……、天より星下り、四ツに割れ、童のすがたあらわれ、手に孝感滅蛇といふ四字の旗揮り、頭れ給へば、急(忽)ち蛇体は皮肉分散して滅す。但南表の幕二幅目裂け出す」。こうして姉は助かり、世子の嫁となり、弟は婿となり、幸せとなった。

この「孝行之巻」は、話のなかにあるように、「むろけ^{ムルチ}てる池^{チル}」に住む蛇が災いの元凶である。その「むろけ^{ムルチ}てる池^{チル}」には、つ

ぎのような言い伝えがある。

北谷(亦、北溪と称す。首里の北四十里に在り。この府、稲田多し)。属村県十二。北谷(無漏溪有り。義本王、宋の淳祐中に当り、溪中の悪蛟、暴風雨を興して患を為す。童女を募り犠として之を祭る。宜野湾の章氏の女真鶴、募に応じ、身を捨てて母を養わんとす。孝、天神に感じ、蛟を滅して害を除く。王、大いに喜び以て王子を配す)。浜川、砂辺、……、前城。

これは、一七一九年の冊封使として琉球を訪れた徐葆光が記録した『中山伝信録』の記載である²⁵。まさに、玉城朝薫の組踊が演じられた時である。ここでは、「義本王、宋の淳祐中に当」たるとされている。義本王は一二四九~一二五九年、舜天王統の最後の王である。「孝行之巻」は、この『中山伝信録』の「北谷(北溪)」のいい伝えがもとになったと考えられている。しかし、同時に、『搜神記』巻十九の話にも類似している。はたして、徐の『中山伝信録』の記載のみを信じてよいのだろうか。

この疑問は、まだ、解決していない。

山本綾乃さんの卒研は、これ以外にも、九州地方に伝わる伝承との関係を考察の対象としていた。『古事記』上巻スサノヲのヲロチ退治譚から、『搜神記』組踊、九州地方の伝承と、いわば、東アジアを中心とする民話・伝説にかかわる広がりをもった卒研のテーマであった。

ところで、この卒研の調査の過程で、つぎのような資料と遭遇した(もちろん、山本さんが大学図書館から見つけ出したものだが)。すなわち、笹間良彦『蛇物語』(第一書房。1991)にアイヌの伝説として載せられていたものである。

北海道小樽市手宮の山の西北にある岩の裂け目に大蛇が住んでいた。

という冒頭ではじまる。以下、あらすじを記す。

このあたりの部落一帯では、毎年、娘をひとり、生け贄として捧げていた。今年も差し出さなければならぬと村人たちは憂いていたところ、ひとりの村人の夢枕に大蛇が立って、「今年は十二、三歳の娘を差し出せ」と嚇した。村人たちが困って相談していると、「イワナイという酋長の娘」が、私は今年十三になりますから犠牲になります、と申し出た。まわりがいろいろと引き留めるが聴かない。「あきらめて人身御供の箱に娘を入れ、大蛇の出る廟に運んだ」。娘は、「マキリ(アイヌ族の用いる小さい刀)」と可愛がっていた「アイヌ犬」を一緒に箱に入れてもらった。

夜になって、生臭い風が吹き、蛇が現れた。「大蛇は廟のまわりを長い体で巻くように囲むと、頭を持ち上げて四辺を窺ってから、鼻先で扉を押し破り、娘の入っている箱の蓋を押しつけ、なかの娘を見下ろして一口に呑み込もうとした」。そのとき、犬が飛びだし、蛇

の頸にあたるところに噛みついた。そこは急所だったようで、蛇が苦しみはじめた。箱に潜んでいた娘は、サッと踊り出し、手にしたマキリで蛇の首を切り落とした。翌朝、酋長たちが廟を訪れ、驚くほどの大きさの蛇の死骸があった。「娘と犬は助かっており、これ以後大蛇の被害はなくなったという」。

この話について、笹間は、つぎのようなコメントを書きしめている。

大蛇の人身御供伝説と、犬が蛇に食い付いて忠義を尽くしたという伝説が混じたもので、アイヌ族間にまで、こうした類の伝承が広がっていた証左である(犬が大蛇を食い殺して主人を助けた話。一九三頁参照)／しかしこの伝説を生じる元はアイヌ族間の他の強暴な部族が、弱い部族の集団に対して年々処女要求をして、それに泣かされていたところに、忠実で力のある男がこれを撃退した話などが潤色化されたものであろう。(p.80.)
／改行。以下同じ)

すくなくとも私はこのようなアイヌの話は知らない。すでに示したように、この話は、『搜神記』卷十九冒頭に酷似する(結構長いの、要約した。ただし、括弧の部分は笹間の原文である)。いくつか疑問点を挙げておこう。

①この話は、アイヌ語で語られていたのだろうか。それとも、日本語なのか。すくなくとも、笹間には、そうした疑問もないように思われる。

②この話の採取ないしは引用先はどのようになっていのか、全く記述がない。私が、笹間に直接手紙を送り、この点について問い合わせたが、引用であること、しかし、その引用先については記憶がすでない、とのことであった。

③笹間のコメントの後半に見られるようなアイヌの部族間に「処女要求」などということがあったかのような記述があるが、その根拠は不明である。

④しかも、この話自体にもあるように娘の勇気を讃えるモチーフは消去され、「忠実で力のある男がこれを撃退した話などが潤色化されたもの」となってしまっている。つまり、笹間のジェンダー観があらわにでてしまっていないだろうか。

こうした疑問点を気にしながら、どのように調査をすればよいか、山本さんの卒研の時点では、このモチーフはペンディングした(卒研のテーマが分裂する可能性があった)。

2

今年(二〇一〇年)の二月、台湾へ文献調査に行った。直接には、山本さんの卒研のときのモチーフとは関連しないが、気にはなっていたので、出かけるまえに、台湾大学図書館のアイヌ関係の書物について検索をかけてみた。台湾大学図書館の五階の特蔵資料は、日本が植民地として統治していた時代の台湾総督府の蔵書・資料が収蔵さ

れている。アイヌで検索をかけると、つぎのような書名があがった。

①知里幸恵『アイヌ神謡集』 大正十五年六月廿五日再版発行

郷土研究社

②青木純二『アイヌの傳説』 大正十五年五月十日初版発行

大正十五年五月十四日再版発行

第百書房

③工藤梅次郎『アイヌ民話』 大正十五年三月十五日発行 工藤

書店

①の初版は、大正十二年(1923)八月十日に発行された。しかし、その年の九月一日は関東大震災、おそらく初版はそれほど流通しなかったのではないだろうか。『アイヌ神謡集』については何度か論じてきたが、まだ、初版も再版も目にしたことはなかった。この機会に、ぜひ見ておきたいと思った。そして、実際に台湾大学で①を見たとき、いささか興奮してしまった。もともと『アイヌ神謡集』は、フランス装といって、裏表に一六頁を印刷し、それを折りたたんだまま製本したものであるということは知っていた。読者は、ペーパーナイフで、折り目を切りはなしながら読んでいくのだ。①は未読、もとのフランス装のままの本であった。もちろん、切り離しはしなかったし、そのまま返却したが、『アイヌ神謡集』がフランス装の本であることが、この①を見たことによって確認できたのである。

②と③は、さきの疑問につながっている。もしかしたら、これら

の書物のなかに、笹間が引いた話載っているかも知れないという見通しである。この見通しは見事に的中した。

②に「大蛇を殺した娘」という題がつけられた、つぎのような話である。いささか長いが、『搜神記』や笹間の話と比較のために、載せておきたい。

小樽手宮の山の西北の裂け目に昔大蛇が棲んで居った。長さ七八丈、大きき十圍かこもあつて、村人に怖がられ、喰はれて死ぬ者も多かつたので、村人たちは牛羊を供へて、祭りをして見たが、何の効もなかつた。／その大蛇が、人の夢枕に立つて、十三歳の無垢の乙女を喰ひたいといったとやらで、村人たちは持て余して居った。／しかし相変はらず害をするので、已むを得ず、賤しい者の子や、罪ある家の子などを貰ひ受けて養ひ置き、八月になると、祭りをして大蛇の穴の処へ其の児を送ることにした。すると大蛇が出て来て吞んで了うといふ風で、年々それが例となり、すでに九人の乙女を供へましたが、十人めの乙女が入用となつて、それを募り探さうになつた。／イワナイの酋長には、男子が無くて、六人の女兒が居った。その年若い女兒が自分で犠牲にならうと申し出た。／父母は許さう筈もないのに、娘が言ふには『家には、不仕合で、男の子が一人も無くて、女の子ばかり六人も有ります、有つても、無いと同様かと存じます。女の子では、御両親の為に何の御役にも立たず、此方から御助け申し上げられないばかりではなく、衣食の程も無

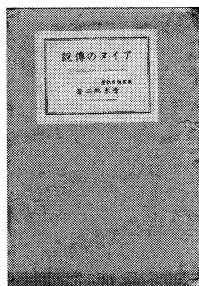
益であり、生きて居る効もございせんから、早く死にたいと存じます』と意外な覚悟を聞いて、父母は尚更手離しかね、娘の願を許さなかつた処、娘は家を脱け出して募に応ずるといふ始末、とても思い止まらせる訳に行かなかつた。／かくて娘は、いよく犠牲となることに決まりましたが、思ふ仔細ありと見え、切れ味良きマキリと蛇を咥ふ犬とを請ひ受けることにした。／八月となつた。娘は大蛇を祭る廟に入り、懷には剣を忍ばせ、猛しき犬を据え、先づ鹿の肉を穴の口に供へた。／やがて這ひ出る大蛇のいきほひ、頭は困まどろほどもあり、眼は二尺の鏡の如く、穴の口なる肉の香を嗅ぎ、これから先へと啗ひつく、様子を篤と見すまして、乙女はこゝぞと犬を放つた。／必至の猛犬に噛みつかれて、急所の痛手堪へ難く、さしもの大蛇も、苦し氣にのたうつて、とうく醜みにくき亡骸を曝した。／娘は、大蛇の穴を探り、前は喰はれた九女の髑髏を取り出して、言葉も荒く『如何に女の身なればとて、氣の毒にも大蛇に喰はれるとは、弱いにも程があります』と、叱り氣味に言い放ち、其のまゝゆる／＼と歸つて来たといふ。

この書の「はしがき」に、青木はつぎのことを書きとめている。

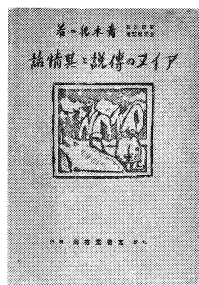
私が牛尾を姓し新聞記者として北海道各地を流転中に得た大きな仕事はこのアイヌ研究であつた。こゝに書いたものは全部が古文書をあさり、あらゆる伝説研究書を読破し、その上、親し

くアイヌ部落を訪ふて古老達に聞いた話ばかりなのである。

そして、この書に収めた話は『婦人公論』『淑女画報』『大阪朝日』その他の諸新聞雑誌」に所載したものとあらたに加えたものがある、という。だが、青木のいう「古文書」や「伝説研究書」なるものがどのようなものなのか、それらの書名は、この本に一切記載されていない。さらにいえば、『アイヌ部落の古老達』から聴取したと



(写真①)



(写真②)

いうが、どこの部落の誰から聞いた話なのかも、つまり、フィールド・ノートに当たる記録も一切無い。

だがお断りせねばならぬことは、口碑といひ、伝説といひ、あるいは記憶の錯誤があり伝文の訛誤があり、あるひは移動轉嫁せるものも尠くない。著者は歴史家ではなく、民族研究者でもないのだからこれらの考証は他日に期して、こゝでは、数年苦心して蒐集した口碑伝説を列記するにとめる。

「歴史家ではない、民族研究者でもない」青木が遂行する「アイヌ研究」とは、いかなるものであるのか。

尚、更にアイヌを離れた蝦夷の伝説、現在のアイヌ達の情話、追分唄物語なども書店がゆるして呉るれば、引続いて発行したい希望を有して居る。

「考証は他日に期」す、といいながら、こうしたもの言いをする青木の「アイヌ研究」とはなにか。すくなくとも、青木が、この書に収録した「大蛇を殺した娘」という話は、『搜神記』第十九巻の収載されている話に酷似している。もうすこしいえば、ここから引用したとおぼしい笹間のものより、より『搜神記』に近い。『搜神記』に見える表現を踏襲していると思われるところがある(たとえば、「長七八丈、大十余围」「或與人夢、……、欲得啗童女年十三者」「共請求人家生婢子、兼有罪家女養女。至八月朝祭、送蛇穴口。蛇出吞之」。「寄人祝穴、得其九女髑髏、悉举出、咤言曰「汝曹怯弱、為蛇所食、甚哀慙」。於是奇女緩歩而歸」など)。青木が、どのような「古文書」「伝説研究書」にみつけたのか、あるいはどこの「アイヌ部落の古老達」から聴取したのか不明であるがゆえに、青木が、いわば『搜神記』第十九巻の話を「アイヌの伝説」として収載したという疑惑は消えない。一步引いても、その出典や採取先があったとするなら、現時点からそれを確認する方法があるのだろうか。

3

ところで、この青木純二なる人物はどのような人物なのだろう

か。『アイヌの伝説』の函の表には、「東京朝日記者」という肩書きが見られる（写真1）。この本は、大正十五年に第百書房から出版されたが、その三年前、『アイヌの伝説と其情話』という書名で、札幌の富貴堂書房から出版されたものの再版である（写真2）。その表紙の肩書きには「東京朝日新聞社記者」と書かれている。内容は同じだが、

御味方コタン乃

者ども赤人と

戦争うち勝ち

たる図

とある「東蝦夷夜話 巻之下」の一図を右版図で載せている。

つまり、この『アイヌの伝説と其情話』は三年後、東京の出版社が再版するほど流通したいえよう。その青木純二について、阿部敏夫は、つぎのように述べている。

本名 中尾兵志、福岡市外千代町。高等商業高校三年まで。福岡毎夕主筆。函館日日新聞。

阿倍は、『新聞人名辞典』の大正一三年、一四年、昭和二年に青木の記載があり、そこから摘要を記している。その説明のなかにつぎのようなことを述べている。

私が面白いなと思ったのは、この『新聞人名辞典』というのは記述項目が決められていて、依頼された方々が自由に記入して、そのまま掲載するような内容になっているんじゃないかと

思います。青木純二さんのところには「皇室中心主義」などとでているわけですから。他の方々を見ると「人道主義」だとか「国家主義」だとか、その他にも「そんなものはない」というようなことを書いている人もいます。そういった意識と、その『アイヌの伝説』、著者との絡みで無理にこじつけることはありませぬけども、ひとつの視点というものを探ることはできるのではないかと思います。

阿部の指摘は、『アイヌの伝説』の収載され花をモチーフとした話を分析し、「全くアイヌの方々の持っているアイヌ文化の理解ではなく、和人的な発想で地名だとか登場してくる人物にアイヌの人々を使っているだけにすぎません」とに関連する。つまり、青木純二は、アイヌと和人（日本人）とのあいだに差異のないことを「伝説」をとおして描きだそうとしているのだ、ということができる。先に示した「東蝦夷夜話」の一図は、「赤人」＝ロシアと戦うアイヌの図であり、そこにはすでにアイヌが和人（日本人）の味方であるということが示されている。青木が「皇室中心主義」というのは、まぎれもなく天皇国家中心主義と同義である。

ひとつの仮説であることは承知のうえで、つぎのような問題点を述べておかねばならない。すなわち、青木の『アイヌの伝説』（あるいは『アイヌの伝説と其情話』）に所載された「大蛇を殺した娘」が、およそ七〇年近くのちに笹間によってアイヌの民話・伝説として転載されたこと、しかも確かな根拠を提示することなくアイ

ヌの民話・伝説としてしまっていることに驚く。つまり、青木のアイヌ民族にたいする認識がそのままに笹間に引き継がれてしまっていることの安易かつイノセント（無自覚）に、日本人の異文化理解、他者理解の貧困さがみられる。

このことの傍証のひとつとして、つぎのことを掲げておこう。

この『アイヌの伝説と其情話』（あるいは『アイヌの伝説』）に採録されている「悲しき蘆笛」という話。

阿寒湖のほとりにモノベツトというアイヌの小部落がある。この部落の酋長シパチにセトナという美しい娘があった。セトナが外へ出るときはいつも召使いの息子マニベがお伴をしていた。セトナが一六歳になり、婿を取る年となった。その誕生の祝いの宴が開れていた。マニベは主の美しい娘にふさわしい婿が来るようにと願いつつ、ひとり湖に船を出し、蘆笛を吹きならしていた。セトナの婿に副酋長の次男メカニが選ばれたという評判がたった。メカニは猟もうまくなく、村の評判も芳しくなかった。マニベは、心配のあまり、セトナにメカニを婿に取ることが決まったのかとたずねる。だが、セトナはそんなことは知らない、自分には好きな人がいる、という。それは、お前だ、と告げる。マニベは、セトナの気持ちを受け止めながらも、主への忠に叛くことを懼れる。ある日、メカニが、セトナに言い寄っているところにマニベが遭遇する。マニベはセトナの窮地を救うが、メカニの恨みを負ってしまう。マニベが森の薪取りに行った帰り、メカニに襲われるが、もみあつた末メカニのもの

っていた刃で刺し殺してしまった。マニベは人殺しの罰に処せられることを思い、ひとり湖に船を出し、蘆笛を吹きながら、湖の奥へと消えてしまった。一方、セトナも、マニベへの思いに絶えかね病に伏し、とうとう死んでしまった。「それからは、湖の奥に生ずる玉藻の中には、きつと、二つ一緒になったのが只一個あるといふ、そして阿寒おろしに誘はれて湖に方から女の泣声に混じつて、悲しげな蘆笛の音が聞こえてくるさうだ」（山の伝説と情話より）。

この話は、阿寒湖のマリモ伝説として、流布されている。しかし、すでに、この話が、青木の創作であることが指摘されている¹。もうすこしあからさまに言えば、この話のモチーフは、セトナとマニベの熱愛ではなく、マニベが主への忠義とセトナへの思いに引き裂かれ、「セトナ様、お身様のお心は、何んでマニベの有難く思はぬ事が御座います。だがマニベはお身様の辛こそ願へ、お身様の願を容るゝ事は……マニベは主人の娘とたたふ不忠者にはなりたうございませぬ」という、ここにある。主人に忠であることが重要な倫理観である、と。そこに、「皇室中心主義」者の青木の倫理観が反映してはいないだろうか。

注

1 『搜神記』（中国古典文学基本叢書）中華書局出版）

2 以下の組踊りの内容については、犬飼公之『玉城朝薫の世界』（瑞木書房、2006）に所載されたテキストに基づいた。

- 3 『中山伝信録』（日本庶民生活資料集成）第二十七集所収。三二書房。1981）。
- 4 阿部敏夫「和人にアイヌ文化理解について」（『環オホーツク』1998・No 1。1994.3）
- 5 ネット上のいくつかのサイトでこの点が指摘されている。高橋真『アイヌ伝説集』（コタン屋1999）が、この「悲しき蘆笛」のはかに、もうひとつの別の伝説を載せているが、前者が創作であることは触れていない。更科源蔵『アイヌ伝説集Ⅰ』（『更科源蔵アイヌ関係著作集Ⅰ』みやま書店。1981）に収載されている「阿寒湖マリモの伝説」（同書pp.231～238）には、高橋の後者の話を載せ、前者が太正時代の創作であることを指摘している。

〈まるやまたかし・本学教授〉

第八十号 目次 二〇〇九年 三月

〈源氏物語小特集〉

『源氏物語』における字音語―紫上の場合― 漆崎 正人

六条院・三条宮物語における継子・二人妻譚と平中引用

―雲居の雁・玉鬘をめぐって― …… 小山 清文

後宮―封じられた嫉妬― …… 丸山 隆司

『藤妻冊子』源氏物語和歌注釈稿（上） …… 山本 綏子

* * * * *

内田百閒「サラサーテの盤」論

―モダニティ・知覚・主体― …… 山田 桃子

花田清輝ルネッサンスにむけて

―生誕一〇〇年― …… 菅 本 康 之